

メイヨークリニック研修に参加した方々からのレター

第3回（1994年度）メイヨークリニック看護研修に参加して

竹股喜代子

（公益社団法人 日本看護協会 看護研修学校 学校長）

1 はじめに

このたび、木村看護教育振興財団の海外研修プログラムに参加したメンバーとして、その研修体験を寄稿させて頂くことになりました。思い起こすと研修参加以来すでに20年近くたっていることに年月の過ぎ去る速さを感じるとともに、米国、日本の医療・看護の姿も20年の様々な変遷を遂げていることに改めて気付かされます。

私は、1994年度のメイヨークリニック看護研修参加者の一人ですが、当時の個人の背景としては、千葉県南房総鴨川にある亀田総合病院の看護部長に就任してちょうど3年目に入ったところでした。看護部のトップマネジメントの初心者から少しずつその責務の大きさを自覚して、様々な課題をかかえて日々明け暮れていた最中にこの研修プログラムに参加させていただく機会を得たわけです。参加したかった動機は、まず米国の医療・看護の実際を見たかったことと、それから米国きっての優れた病院とはどんな病院かということに対する興味でした。そしてさらに興味を深めたのは、私が看護部長になった時に、亀田総合病院がメイヨークリニックを目指しているということを知ったことでした。その内容は、「メイヨークリニックが辺境の地であって、素晴らしい医療活動を展開し、病院を中心に町が出来たということ。医療活動だけでなく研究、教育事業にも力を注ぎ、常に医療の質を追求していること。そして何よりも患者第一主義を貫いているということ」でした。

期待を胸に向かったアメリカ合衆国、ミネソタ州ロチェスターに、確かに北アメリカ大陸の辺境(であったであろう)の地に亀田の目指す病院の姿がありました。

2 研修計画について

まず、事前の準備についてですが、何ととっても最大の関門は英語力でした。参加要件としてこの時は確か、「ある程度の英語力があること」だったと思います。その審査の詳細はどのようなであったかは知りませんが、私の場合は、(実際の力はともかく)10年前に英国留学をしていたことが助けになったのではないかと推察しています。実際、現地での英語理解は至難でした。アメリカンイングリッシュが耳に慣れるまでに随分時間を要し、最初は自分が思っていたほど「英語力がないこと」に愕然としたことを思い出します。

手続きなどの準備の中で驚きそして感銘したのは、研修の領域や研修内容の希望が細やかにとられたことでした。そして、それぞれの研修生の事前アンケートの希望に

応じた云わば、オーダーメイドの研修企画であったことです。

ちなみに私は、以下のような希望の中から可能な計画を立てて頂きました。

- (1) 看護管理に関すること
 - ①適正人員配置の考え方（看護業務量の測定の実際→方法・具体的運用法）
 - ②看護部組織の考え方とその実際（看護管理部門の組織と機能の実際 外来・臨床部門の組織とメンバーの業務分掌 病院組織における看護部の位置づけと役割）
 - ③人事管理について（業務評価の方法—人事考課、とその実際→処遇について、勤怠管理について スタッフの精神衛生管理について）
 - ④看護管理の予算について（予算内容とその運用の方法）
- (2) 看護の専門分野に関すること
 - ①継続教育システムについて（教育組織・内容・方法→時期や期間）
 - ②看護体制（プライマリーナーシングの実際）
 - ③専門看護師の制度とその実際（看護の役割拡大について）
 - ④臨床での看護の実際
- (3) その他
 - ①米国の看護事情一般
 - ②救急医療体制について
 - ③病院と地域のつながり→訪問看護
 - ④小児病棟の看護の実際

*以上の希望から、当時の私の関心事項がはっきり表れていることが見て取れます。

3 メイヨークリニックでの研修

(1) ファーストインプレッション

オーダーメイドの研修企画は、メイヨーに訪れて期待を裏切らないものであることがすぐ感じられました。そして2~3名の研修生に1人の継続教育部の担当ファシリテーターが決められていたことなど、当時外国人研修生のための責任者をされていたサンディーさんを始めとしたメンバーの方々の、暖かくそしてきめ細やかな準備と対応に感銘することしきりでした。そして何よりも、初めての対面で、緊張と不安な面持ちの私たち10名の日本人看護師に、満面の優しい微笑みで迎えてくださったとき、大袈裟ではなく、「まさに看護の心を具現化した人とはこのような方たちだ」と思ったことを今でも鮮明に思い出すことができます。

(2) 研修の実際で印象的であったこと

欲張って多岐にわたる研修希望を出したので、一か所でじっくりと、というわけにはいきませんでした。その為、看護の実際を研修したというより、管理体制

や、日本にはまだ整っていない環境に目が止まりました。例えば院内にかなり立派な図書館があって専属司書サービスが充実していたこと、患者・家族への病態説明のための最新情報がすぐ手に入るサービスがあること、組織内イントラネットがすでに機能していたこと、それから、患者・家族のための独立した教育機能が整えられていること(有料)、などなど。

現在の日本の病院施設ですでに導入されていることもありますが、当時の私にとっては目を見張ることばかりでした。後年、在職していた病院で導入するときに、イメージがはっきりできて大変役に立ちました。

何といても一番印象に残ったのは、研修の初めに行われた看護部長の病院・看護の概要説明で、メイヨーの看護職のプロフェッショナルとしてのプライドに満ちた説明でした。質疑の中では、ナースマネージャーは‘手あげ’でエントリーすることや、プライマリーナーシングでのナースの要件は、ひとたびライセンスを持てば例え新人であっても変わりはないことなどが話されました。一般に米国のナースたちと接すると、彼女らの専門職業人としての責任性についての考え方(覚悟?)には、これからの日本の看護師のあり方を示唆させられるに十分なものがあります。

ちょうどこの年、1994年1月から1年間連載で、雑誌「看護」(日本看護協会出版会)に「看護部長日誌Ⅱ」を書いていましたのでその10、11回の中で「アメリカの看護事情」を紹介しました。この中の幾つかを抜粋させていただきます。

○メイヨーでは、「The Medicus Patient Classification Methodology」というツールを使って個々の患者の分類をしていました。これは民間会社の開発によるもので、全米で約350~400の病院が利用しているようです。具体的には約30のチェック項目があり、内容は食事・排せつの世話や輸液療法の必要性であるとか、スキンケアの必要性あるいは精神面でのサポートはどうかなど、必要な看護ケアが網羅されていて、それらの合計得点により患者の重症度・緊急度を6段階に分類しています。そして得点は同時に看護ケアの必要時間も出されますので、ユニットの全患者のトータル得点で自動的に看護スタッフの数が算出されるのです。

○メイヨーにおける適正人員配置には看護資源に関するセクションがあって、そのディレクターがスタッフィングやスケジューリングの責任を持っているようです。そのもとにはそれぞれのスーパーバイザーがいて、10人ぐらいの専属スタッフ(看護職ではない)が実務的な仕事をしていました。現在メイヨー全体での稼働数が約1300床、看護職員は2755人(看護補助者、病棟クラーク含む)に及びますので専任のスタッフの人事管理は必須でしょう。

○フロートナースは基本的には“何でもできる”ことが要求されるのですが、大きくは集中治療部門と一般病棟部門に専門を分けているようでした。最低1年の病棟経験が必要で、入職時5~6週間から人によっては3~4カ月のオリエンテーション期間があるとのことでした。さまざまな経験をするのが好きなナースが希望するのですが、適性でない人にはやはり同じ部署で働くことを勧めるそうです。それからひとたびフロートで働くと長期に勤めるとも言っていました。

○看護の役割拡大はアメリカにおいて1960年代から最古の専門看護として看護麻酔師が出現していたとのことでした。なぜ、役割拡大が特に1960年以降急速に進んできたのかを見てみると、内なる背景として看護教育の高学歴化と看護婦（ママ）自らの機能拡大への指向があります。そして外なる背景は、アメリカにおける医療の歴史の中で、深刻な医師不足、特にプライマリーケアの医師不足があったこと、それから65年に助医師制度が始まったことにより医師による“絶対的とされていた医業務”が他に移譲され得ることが認知されたことが挙げられます。こうした看護サイドの準備と、医療社会の背景とニーズとが相まって、ナースプラクティショナーが発展していったようです。それから、更にクリニカル ナース スペシャリストが高度に専門分化された医学とその受益者のニーズから発達してきたわけです。

(3) その他、オプション企画

オプション企画では希望者に週末のホームステイ体験がありました。私も、研修仲間と二人で、ロチェスターの酪農家の家でお世話になりました。わずか一泊二日でしたが忘れがたい体験でした。偶然に、牧草地で分娩したばかりの親子牛に遭遇したため、乳牛の一生（の一部）を垣間見ることになりました。子牛はすぐ母牛と離され、母牛はただ人間のためにミルクを搾られる運命で、ちょっとした間でしたが乳牛の一生に想いを馳せたものでした。若干ですが救われたのは、牛にとっての環境でした。広々とした牧草地に放牧され、牛舎は清潔で酪農家族は愛情を持って世話をしていることが感じられたからです。そしてこのご家族は私達にも暖かい酪農家族の姿を見せてくれました。アメリカでの看護研修でこのような特別な体験が出来たことはそれまで限られた環境の中での経験しかなかった私には貴重な思い出になっています。

その他、研修期間のウイークエンドは、メイヨーのスタッフの方々から、ご自宅に招待していただいたり、フェスティバルに連れて行って頂いたり、常に何らかの計画を立てて暖かく私たち研修生を気づかせてくださったことを今でも感謝の気持ちで思い出します。

4 おわりに

メイヨーでの研修関係の資料を引っ張り出し、20年前の記憶をたどりながら書き進める中で、改めて研修の内容、滞在中の体験がここに書ききれないほどの実りがあったことを認識しました。特に研修内容については細かくお伝えできませんでしたが、それはこれから研修参加される方々が自ら学ばれることと期待しています。

それからこの研修のもう一つの大きな実りは、研修参加したメンバーがそれぞれのネットワークで現在まで繋がっていること、サンディーさんを始めとするメイヨーのナースとの繋がりを持ち続けていることです。

このようなメイヨークリニックでの看護研修は、木村看護教育振興財団の変わらない周到なオーガナイズの素晴らしさと長年のメイヨークリニックとの親交の賜物であり、この恩恵を授かった看護職の一人として感謝申し上げます。

最後になりますが、記憶が不鮮明で正確さに欠けている個所がありますことをお許し頂きたいと思います。

【プロフィール】

竹股 喜代子<たけまた きよこ>

1970年 東京大学医学部附属看護学校卒業。以後、虎ノ門病院、癌研病院の勤務を経て1982～1985年まで渡英。英国RN取得し、ロンドンのThe Hospital for Sick Childrenにて小児看護専門コース修了。帰国後、荻窪病院、1990年亀田総合病院の小児病棟に勤務する。

1992～2011年亀田総合病院 看護部長、医療法人鉄蕉会理事就任。2011年5月、同退職。在職中、民間病院の立場からの看護職の経営参画について、電子カルテ・看護情報システムの構築と運用、医療の質の第三者評価とアウトカム評価、変革の時代の外来看護、継続教育—キャリア アドバンス システムの導入などの取り組みを行う。

2009年8月から厚労省「チーム医療推進に関する検討会」委員、ひき続き2010年5月から現在まで、「チーム医療推進のための看護業務検討ワーキンググループ」の委員として「看護師の役割拡大」の推進に取り組んでいる。

2011年10月より 公益社団法人日本看護協会 看護研修学校 校長として就任、現在に至る。